教育こども委員会行政調査報告

教育こども委員会委員長　　門田　まゆみ

１．日程

令和５年８月 29 日（火）～30 日（水）

２．調査項目

（１）さいたま市立大宮国際中等教育学校について（さいたま市）
（２）不登校特例校分教室「みらい学園」について（大田区）
（３）医療的ケア児地域生活支援促進事業「インクルーシブひろばベル」について（品川区）

３．委員長所見

（１）さいたま市立大宮国際中等教育学校について

国は 2040 年の社会の姿を AI や IoT、ビッグデーター、ロボティクスといった高度化した先端技術が、あらゆる産業や社会生活に取り入れられ、社会の在り方が大きく変化する超スマート社会（Society5.0）の到来、グローバル化、人生 100 年時代や人口減少社会と想定している。現時点においても私たちは国際化・情報化の急速な発展により社会の構造の大きな変化の端緒を感じ始めているところであるが、そのような社会にあって自立的に活動していくために必要な「知識や技能の確実な獲得」やそれを基にした「思考力・判断力・表現力」そして「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ姿勢」をバランスよく育むことで、新たな価値を創造していく力を持った人材を育成することが求められており、学習指導要領改訂の考え方においても新時代の到来に向け必要となる資質・能力の育成と学習評価の充実が盛り込まれていることから、従来の「何をどれだけ知っているのか」から「何をどのように学び、何ができるようになるか」といった獲得した知識が縦横へ広がり深まることで生活や社会の課題と向き合い解決へ向かう力を育む探求学習へと変化していくと思われる。

そういった教育改革のなかで、さいたま市立大宮国際中等教育学校は、さいたま市立大宮西高等学校の改編により、埼玉県内初で唯一の公立中等教育学校として 2019 年４月５日に開校し、現在５年生を最高学年として１学年 160 名（男子 80 名・女子 80 名）が学んでいる。同校は①教育課程の基準の特例を活かした特色ある教育課程によって、全ての生徒が６年間の系統的かつ継続的な学習活動を展開、②国際バカロレアのミドル・イヤーズ・プログラム（４年間）及びディプロマ・プログラム（２年間）認定校として、学ぶ意義を理解し、学び方を学ぶ、課題解決型の探求学習、③さいたま市が目指す３G「Grit やり抜く力」「Growth 成長し続ける力」「Global 世界に視野を広げる力」を校訓に掲げ、未知の状況や課題に直面しても臆せず諦めずに取り組み、協働し

て最適解を導く「未来の学力」を養う、の３つを掲げて、様々特徴的な取り組みを行っている。例えば、２学期制・隔週土曜授業や道徳・学活を除いて授業時間を確保しやすい 100 分授業、奇数単位を調整しやすい A 週 B 週と分けた時間割や１学年４組を２クラスずつにし、更に３グループに分けた学習グループ制を導入することで効果的な学習ができるように工夫されている。

さいたま市は英語教育に力を注いでおり、中学生の英検 3 級取得率は 86.6%と福井県ともに突出していることから、同校の英語教育では毎朝 15 分の English Training、週２時間英語以外の教科を英語で学ぶ English Inquiry、週４時間全てを英語で行う Language Acquisition などの取り組みが見られた。私たちが授業見学した最中も教員はもちろんグループ学習やちょっとした隣との会話も英語でされていた。２クラスに教員配置は３人で、その内の１人はネイティブである。ネイティブを確保する為に県が特別免許を出し、終身雇用といった工夫もしているというが教員確保には相当の苦労があると察せられる。

私たちが最も驚いたのは中間・期末考査は一切行わないということだった。小テストは教科によって行われるが、それはあくまで自身の学習を振り返る為の補助ということだった。それならどのように評価をつけるのかという疑問が浮かんだが、生徒たちは示された課題について自身で調べ、考察し、その結果をレポートとしてまとめ発表し、それを総括評価するという。つまり教員は一つの課題に対して 160 通りの解答を評価することになる。実際廊下に掲示されていたレポートは同じ課題でありながら、それぞれが違った角度からの視点で作成されていた。教員は指導技術を深化させるために毎年同じ学年の同じ教科を担当する。

生徒の自主性を育むことを目的に、三者面談では生徒が教員と保護者に対して自分の現在の取り組みや課題、自身の将来像とその自分がどのように世界と関わっていくのかといったプレゼンを行ったり、後期課程（高校１年）ではパーソナルプロジェクトに取り組む。これは、自分たちで課題を見つけ、考察し、課題解決・克服への道筋をつけ発表をし、更には自分たちに何ができるのかを考えて実践するのだが、教員はアドバイザー程度の関りで、その過程の調査、手続き、準備はすべて生徒が行うといった主体的な学習である。また放課後は、様々な種類のワークショップや部活がある。部活動はシーズン制で行われ、前期・後期で違う部活に所属することも可能としているのも従来の在り方と大きく異なる。

今回レクチャーを担当していただいた関田校長は「入学時から現在に至るまで様々な機会をとらえ言葉を変えながら『ここで世界の未来のつくり方を学ぶことと、自分の成長や幸せがどのように世界の幸せにつながるのかを意識する』ように話している」と話されていたことが印象的であった。さいたま市の目指す３G をどのように実現し、子ども達を育もうとしているのかが、同校にぶれずに一貫していると感じた。

本市の教育は「人は人によって人になる」との教育理念の下、「心豊かにたくましく生きる人間の育成を目指す」を目標としているが、教育現場にあって「心豊か」「たくましさ」「生きる力」は、どのように受け止められ実践されているのだろうか。今一度現場の声を聞き、必要であれば具体的な指標を示す必要があるのかもしれない。今回の行政調査でさいたま市の教育目標をそのまま実践する学校を設置したことで、さいたま市の小学校や中学校に大きな指標を示したと考える。本来、進取の気風を持ちグローバル貢献都市を目指す神戸にあっても、神戸の教育がさらな

る高みを目指す為に、こべっこたちがワクワクして世界とつながる公立中等教育学校の設立を検討するべきだと感じた。

（２）不登校特例校分教室「みらい学園」について

神戸市における中学生の不登校生徒は 2016 年度の 1,017 人から 20 年度は 1,891 人に増加。全生徒に占める割合は 5.57%（全国平均 4.3%）で、１クラスに２人いる状況になっている。小学生の不登校児も 20 年度は 843 人で 16 年度の 213 人から約４倍となっており、不登校児童・生徒数は全国平均を上回り、中学生では 20 人に１人の割合に達している。市教育委員会はスクールカウンセラーの配置やフリースクールとの連携などを進めてきたが、孤立し、支援が届いていないと感じる当事者は少なくないと認識し、有識者らによる検討委員会を設けて支援の在り方を模索し、本年７月 13 日に兵庫県内初の中学生を対象とした分教室型の不登校特例校を 25 年４月までの開設を目指すと発表したところである。私たち教育こども委員会に所属する委員もそれぞれに不登校問題に接し、思索をめぐらしつつ教育機会の確保は喫緊の課題と認識をしているところであった。

今回調査に訪れた「みらい学園中等部」は大田区の不登校アクションプランの一つとして設置された大田区立御園中学校分教室・不登校特例校である。本教室は 2019 年４月に東京 23 区初の不登校特例校として開設され､2030 年を目途に不登校特例校として独立することになっているが、現在は大田区立御園中学校の分教室であり、在籍する生徒は御園中学校の生徒として入学・卒業することになる。対象となる生徒は、大田区立中学校に在籍している生徒であること、病気又は経済的な理由を除いた心理的に不安の傾向があり､連続又は継続し 30 日以上の長期欠席の生徒であり、かつ大田区教育委員会分教室入退室検討委員会が適当と認めた生徒とされている。また少人数の細やかな指導を行うが、特別支援を目的とした教室ではない。

本教室の特徴としては、生徒と教職員とが互いに尊重しあい、多様な価値観を認め合いながら学校生活を送ること、学校が生徒にとって安心して登校できる場所となり、継続して登校できるように取り組んでいる。例えば、教員室をガラス張りにし解放的にしたり、休み時間には教職員も一緒に遊んだりと教職員と生徒の距離が近くなるように居場所と絆をつくることを意識してい

る。また周りを気にせずに登校できるように通常の学級の生徒が登校する時間帯を避け、遅めの時間を登校時間に設定し、午前３単位時間、午後２単位時間の授業を行っている。

次に授業の充実として、生徒が自ら課題を見つけ、それについての思考や判断、表現をすることを通して、よりよく課題を解決する資質・能力を育成することや、少人数の強みで ICT を活用した授業を展開し学力向上を図ること、さらには生徒相互の関りを重視したソーシャルスキルトレーニングによって生徒の精神的安定を図り、安心して学べる環境を整えるとされている。本教室２階には各学年の教室と教員室、保健室が配置されているが、中央の大きなスペースには卓球台とテーブルがいくつか配置されている。その一つに作りかけのジクソーパズルが置かれていた。話ができなくてもピースの一つを置くという小さな行為の積み重ねが、皆とつながる、参加へとつながると推察される。このような工夫が本教室の登校率が 80%超という結果になっていると感じた。

また本教室では生徒が学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に着けることができるよう総合的な学習の時間と特別活動の合科による「キャリア教育」では、宿泊行事や移動教室での体験活動や、外部講師を招いての職業講話などを実施している。また５校時終了後に 25 分間を個別の学習時間として設定し、基礎・基本の確実な定着と個々の学習状況に合わせた習熟度別指導、個々の実態に即した支援を行っているのだが、この時間には教職員が総出で行うこともあるという。

大田区の不登校生徒の選択としては別室登校、つばさ教室（適応指導教室）みらい教室、フリースクールがある。つばさ教室は学校ではなく、あくまで学校への復帰を目指すための教室であるが、みらい教室は分教室であり、各学科の評定評価も本校である御園中学と同じである。キャリア教育を行っていることで自身を見つめることができ、卒業後は都立高校などの上級学校への進学や海外留学、通信制高校など自身にあった進路を選択しているという。卒業生の後追い調査も実施しているということなので、今後の効果検証に期待したい。

現在１年生６名、２年生９名、３年生９名（各学年８名を想定）が学んでいるが、大田区には約 1,000 名の不登校生徒がいる。全ての不登校生徒がこの教室の対象になるわけではないが、今後希望者が増えた場合の対応も気になるところである。現在は大田区教育委員会分教室入退室検討委員会が適当と認めた生徒が入室可能であるが、転入室支援として４週間から 8 週間の体験入室を行い、校長など実経験を経た退職者である運営委員が、対象生徒と共に体験入室プランの作成や保護者との調整にあたっている。また分教室であるため本校のクラスが増えた扱いであることから教員の配置定数や、30 日以上の長期欠席を逆手にとり入室を希望するケースもあり、その対応が課題となっているという。

先にも記したように神戸市は 25 年に不登校特例校設置を目指している。教育機会の確保だけでなく、どのような子どもたちを育てたいのか、その為には何が必要なのかという明確なビジョンを持つ必要がある。海と山に囲まれた神戸は地形的には産業が大きく発達するのは難しい。しかし多様な文化を包括する進取の気風は人をのびやかに育み、成長させる可能性を秘めている。私たちは神戸の強みは子どもたちであり、その可能性を育む教育であると確信し、さらなる議論を重ねたい。

（３）医療的ケア児地域生活支援促進事業「インクルーシブひろばベル」について

子どもが子どもとしてのびのびと育っていく中で遊びは重要な役目を果たす。特に幼児にとっては心身の成長には欠かせない、食事や睡眠、排泄などと同じくらい重要なもので、遊ぶことで社会生活を学び、人とのコミュニケーションもとれるようになっていくことから幼児が心身を発達させるために、遊びは必要不可欠といわれており、超少子化となった今、行政は子育て支援に力を入れ、その一環として様々な遊びの場が設けられるようになっている。

また医学の進歩により多くの小さな命が救われるようになった中で医療的ケア児も増えており、令和３年には在宅の医療的ケア児は２万人と推定されている。障がいも多様化している。その中で医療的ケア児や障がい児の遊びはどのくらい重要視され、支援がされているのだろうか。障がい児の育ちに関わる方によると、どのような状態であっても、例えば重度の障がいで身体を動かすことが難しくても遊ぶことで多くの経験をすることができ、さらには意欲が高まり次の行動につながって、結果的にはリハビリになるという話も聞いている。今後、神戸に住む医療的ケア児・障がい児の育ちの為の遊びの場や保護者への支援の在り方について考察する必要を感じた。

今回調査させていただいた「インクルーシブひろばベル」は、品川区の「医療的ケアが必要な児童の支援事業」として障がい児やその家族・きょうだい・友人が遊びを楽しみながら多様な人と交わり、保護者が子育て等の困りごとを相談できる「インクルーシブな遊び場・安心できる場」として 2021 年４月に開設された。管理者によると私たちが訪問した時はまだコロナの影響を鑑み、予約制としているということであった。

児童館の１階を利用した施設はにじの部屋（遊びの部屋）、そらの部屋（スヌーズレンの部屋）、フィーカの部屋（食事の部屋）と３つの部屋に分けられている。遊びの部屋には、手づくり、木製、感触、おままごと、グッド・トイなどの様々なおもちゃや絵本が用意され、子どもの興味に応じて親子で遊ぶことができる。あそびの日と自由あそびの日があり、あそびの日には一週間毎に、遊びの内容を変えて企画・実施している。私たちが訪問した時は、自由あそびの日で２組の親子が利用していた。特徴的だったのはスヌーズレンの部屋。スヌーズレンとは、オランダ語のスヌーフレン「鼻をクンクン臭いをかぐ」と、ドースレン「ウトウトと居眠りをする」の合成語

で『自分で確かめる、探索する』『ゆったりする、リラックスできる』という意味を持ち合わせているそうだ。薄暗い部屋の中で、光や静かな音、かすかなラベンダーの香りを感じられるようになっており、小さなテントやクッションが用意され、思い思いの姿勢で過ごすことができるようになっている。委員からも「落ち着きますね。お母さんも癒されそう」という感想があがった。食事の部屋では持ち込んだ物をきょうだい児も一緒にご飯を食べたり、友人同士でカフェとしてゆっくり過ごすことができるように冷蔵庫や電子レンジが設置されている。また経管栄養のボトルを吊り下げるフックや子どもたちの状態に応じた姿勢や座高に対応できるイスも用意されている。

このようなインクルーシブひろばの目的は、①遊ぶ中で多様な人と関わり互いに理解を深める、②障がい児の親子の仲間づくり、③インクルーシブな地域交流、④気軽におしゃべりできる「場」、としている。つまり子どもたちの交流によってその親や地域へ多様性への理解を促進し地域全体で支えあうことを目指しているということだろう。それは神戸においても必要な取り組みと考えるが課題は大きい。私のもとに届く医療的ケア児や障がい児の保護者からの声には、学校や将来への不安、特性によって悩み事が違う、酸素チューブなどをじろじろ見られる、安心して遊ばせられないといったものがある。特にここに訪れるような小さな子どもは好奇心旺盛で、悪気なく酸素チューブを引っ張るなどの行為もあったということから、障がいの有無に関わらず安全に遊ばせることは、どちらの保護者にとっても非常に気をはることではないかと推察する。

神戸にはこべっこランド、こべっこあそびひろば、おやこふらっとひろば、児童館など年代ごと、地域ごとに居場所となる遊び場を提供している。こべっこランドにはきらきらルームが設置されているが、十分に行き届いた設備が整っているとは言い難い。医療の進歩に伴って子どもも多様化していること、在宅の医療的ケア児や障がい児が増加している中で、そのような子どもたちがよりよく育つ為に、そして保護者が安心して遊ばせる為に、どのような配慮の場を提供できるのか、医療や保育園など現場の専門家を交えて、体系立てた計画を策定し、環境の整備をしていく必要があると感じ、今後の議論としたい。